
スピリットー魂の集う場所ー

穢田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリットー魂の集う場所ー

【Zコード】

N3101BA

【作者名】

稟田

【あらすじ】

10年前に突如発生した。悪魔の襲来。それは平和な日本を一瞬

で絶望へと変えた。

森は荒れ、川は濁り。建物は廃墟と化した。人間達は死線をさまよう。

そんな時に現れたのは聖剣エクスカリバーを使い、精霊を使役し戦う勇者であった。

その者の活躍により、日本は安堵に包まれる。

しかし、悪魔の進行は収まることはなかつた。政府はその勇者に部隊長を頼み、今まで精靈重騎士団ホーリーナイトを立ち上げた。その者達の戦いにより、悪魔は絶滅した・・・と思われた。

それから、10年後。

さらなる戦いが待ち受けていた・・・。

サモナー

動物には靈魂が宿つてゐると言われている。

その魂の形は必ずしも、一つではない。

魂を物理化し、戦わせるもの達がいる。

彼らをサモナー（精霊使い）といふ。

この物語はそんな、サモナー達が集まる。学院で起つてゐるお話。

校長「ほつほつほ。新入サモナーの諸君。お初にお目にかかる。この聖獣木学園の校長をしておる。早乙女じや。よろしく頼むよ。ほつほつほつほ。君たちはこの難問という門を破り、この学園に入学した。秀才ばかりじや。胸を張つていいんじやぞ。君たちはこの学園を経て、立派なサモナーになれるよう。努力を怠らず、頑張るのじやぞ。それでは君達の活躍を祈り、この言葉を捧げて。終わりとする。」

校長「自分の未来は自分で掴む。また同じように相手の未来は相手が決める。ただし、困難は付き物。それを助けるのが仲間じや。この学園では一人ではこなせないものばかりじや。そのため最初の君たちの仕事は仲間。パートナーを作ること。それでは新入サモナーワーの諸君。また会おう。」

祝いの言葉

僕は今。長々しい校長先生の話を眠い顔を擦りながら、眺めていた。こんなに長い話を聞いたのは久しぶりだ。小学生の頃の校長先生を思い出す。外で集会をするときは禿げた頭がやけに眩しかった。それに比べたら、目の前にいる人は白髪でやたらと髪が長く、ヒゲも、もつさもつさ。いかにも大長老の精霊使いみたいなオーラを醸し出している。

世の中にはこんなお爺様がたくさんいるんだろうな~。と、考えつつ。前を眺めていた。

校長先生の「仲間を作れ」という言葉が耳に入り。長い話があわつた。

「ダチか~」

つい言葉を漏らしてしまったが、俺は友達を作るのが下手くそだ。そもそも、人間関係が苦手だ。だから、家から離れたく、この学院の門を叩いたのだ。サモナーが必要とされている時代ではあるが、俺にはあまり関係ない。普通に精霊が使えるなんて、面白そう。そんな甘い考えで受験して、今に至るわけだ。

教頭「それでは新入サモナー諸君は食堂に移動してください。ささやかなパーティを用意しています。それではAクラスの方から移動してください。」

そういうと、Aクラスの先頭から動き出した。この学園には三年生まであり、Eクラスまでの5クラスがある。クラスわけには意味があるらしいが。Aが決して、強いという訳ではないらしい。ちなみに俺のクラスはCクラス。周りをみた感じ、いろんな奴がいた。優等生ばかりかと思ったが。茶髪の奴とか、お宅ぽいやつ。そ

れにタイプの女のもいたりした。これから二年間楽しくなりそ
うだ・・・。

食堂ではお静かに

教頭先生の案内により、俺たちクラスは食堂に来た。到着した後は先輩にテーブルまで案内してもらつた。

テーブルはとても長い長机。木で作られているとは思つんだけど。なぜか光つてゐる。魔力でも帶びてゐるのだろうか？そこまで魔術とかに詳しくない俺でも見える。

案内してくれた先輩に聞いてみたところ。これは普段から魔術に慣れるために作られているらしい。ここだけではなくて、至るところに魔力で生成された物があるらしい、すぐに慣れると言られた。

席に座つていると、隣にタイプの少女が腰掛けた。ショートヘーとロングの中間辺りの髪型に少し髪の毛に茶色が混じつていて、顔も整つていて、胸もそこそこあつた。

「や、やべー可愛いかも・・・。」

女性との交流もなかつた俺にトークを繰り広げることなんてできな
い。自分の情けさに腹が立つ。せつかくのチャンスがー！

「あ、あのー」

隣から可愛いいらしいう声が聞こえた？
俺は恐る恐る、少女を見た。

横姿から見たとおり、とても可愛い子だ。

緊張のあまり、俺はなかなか声を出せなくなっていた。

や、やばこーなんて、話たらいいんだー！

「あ、聞こえますか～？」

「は、はひー！」
し、しまった。声がうまく使えねー！
こんな時はさぞうしたらいいんだ。

と、そんな時に俺の前の席に一人の男性がやってきた。

「すまん、うちのダチが。そいつ、会話苦手なんだわ。許してやつてくれよ。」

こここの名は西城明。せいじょうめい俺の唯一の友達。引っ込み思案だった俺に剣道部という部活を紹介してくれ。色々、手助けしてくれる良い奴だ。

「あ、アキラ・・・。サンキュウー！」

こんな時でも頼る」としかできなこのは情けない・・・。

明は田で合図を送り、俺にまかせると、言おうとしたところ見えた。

まあ、俺にはこの状況は打破できないので、まかせるとした。

「お初っす。俺、こここのダチやつてます。西城明いこます。で。」じつけは西口隆西つながりつす。君の名前はなんて言つの？

さすが、明。こんな状況でも巧みに言葉を操っている。

「はい。私は西島明奈と言います。偶然にも西つながりですね。」

にっこり笑った、西島さんの笑顔は素敵で、その気品あふれる姿に俺は目を奪っていた。

「お、偶然つすね。今後ともによろびくつす。」

「びくつす、て・・。」

少女はクスクス笑いだした。

こんな子と一緒にクラスとは。感激だ。

「隆、そろそろ。しゃべれるか?」

明は俺の性格をわかつていた。たしかに自ら喋るのは苦手だが、途中から介入する分には大丈夫なのだ。よつは自発的言動が苦手なのだ。

「あ。どうもです。西口隆です・・・。よろしくな。」

「あ。はい。いらっしゃようじくお願ひします。」

なんとか会話を交わせたが、練習しなきやだな・・・。

へへ。こんなに施設があるんだ。

その後。俺ら三人は楽しくわいわい、喋っていた。途中から、明奈の知り合いである、守口寛子が乱入してきた。性格は明と似ていて、かなりのムードメーカー的存在。明と寛子は一人で喋り出し、俺と明奈はその話を聞くだけであった。

食堂に到着して、約20分が過ぎた頃。一人の女性職員が食堂の一一番にある台に登っていた。そこにはマイクが設置されており、それに気がついた数名は話すのを止め、前を向き始めた。うちのグループは目も触れず、話すのをやめなかつた。

「お静かに。新入生のみなさん。初めまして、この学園の施設長をやっています。篠原明美です。
改めて、皆さん。」入学おめでとうございます。今後の活躍を期待しています。
ええ～。只今の時刻は5時50分。今から10分間、施設についてのご説明を簡単にしますので。
耳をこちらに向けるよしお願いします。」

今からお世話になる家でもあるしな。校長先生みたいに長話にはならなそだから、聞くことにしよう。喋っていた二人も真面目に前を向いているようだし。

「では一つめ。この学院の敷地内からは出ることとは禁じています。外出届けを出した者のみにだけ許します。この学院を出て、右のほうに行くと、大型のショッピングモールが建てられています。衣料品・食料品・魔力品など。必要な物はそこで補充してください。
二つめ。学院の左側をずっと真っすぐ行くと。精霊の木があります。

ここへは立ち入らないでください。

3つめ。この学院を真っすぐいくと。様々な施設があります。基本出入りは自由ですが、新入生の皆さんには先輩が同行の元お願いします。寮への移動は先輩達に案内をお願いしていますので、心配なさらないでください。

そして、最後にこれは重要なことなので、しつかり聞いてください。皆さん、ご存知だとは思いますが。悪魔の襲撃なども考えられます。悪魔は魔力を感じるとそこに群れて来るという習性があるので。普段は強力な結界が張られていて、悪魔は来ませんが、もしも。侵入してきた場合。全ての建物が赤色に変色するよう作られています。そうなった場合。この食堂に集まつてください。

これはお願ひではなく、命令ですので肝に銘じてください。以上です。」

そういうと、施設長は台から降りて、所定の位置へと向かっていた。

こここの敷地内に入ったときは建物の量に驚かされて、気絶しそうにもなった。まあ、こんだけのサモナーを育成するには当たり前か・・・。

学生食だよね？

施設長の話が終わると、台に一人の料理人らしい服装をした人がのつそりとやってきた。恐らく、料理長と思われる。

「新入生諸君。入学おめでとう。料理長の早乙女源郎じゅ。源さんとでもよんとくれ。では、さっそく。お腹がすいてきてこる時間ではあらうし。食事のタイムといきたいと思つ。」

源さんという人はいかにも料理を何年もしてきたという感じの人で愛着が持てる。料理は運ばれてくるのだとは思うのだが、周りの人を見ると料理人は5・6人しかいなかつた。

こんな、たくさん的人数の料理を作るにはもつといてもおかしくないとは思うんだけどな・・・。

それにどうやって、テーブルまで運ぶんだろうか？

「それでは諸君。目の前のテーブルに注目するんじや。」

俺は目の前を見た。

「おー。この目の前の木のテーブルが夕食かー。いただきまーす。」
もしかしたら、食える木で出来ているかもしね。ではかぶりついてみるか・・・。

「あーん。・・・。」

歯がごりつと言つた。

それを見ていた、明奈がマネして、目の前の木のテーブルを一口。

「か、かちやい・・・。」

「！」、「ひひひ。明奈！これは食べ物じゃないって、それに明！！あなたも見てないで、隆君を止めてよ！」

さつきまで騒いでいた寛子が慌てて、俺等を止めようとしていた。恐らく、このメンバーの中では唯一の常識人だと俺は思った。

「あ、あんたら。これが食べ物だって、なぜ思えるのよ……とりあえず、前向きなさい、源さんのほうをよーくみなさい。」

言われるまま、前を向くと、源さんが手を合わせている。何かを詠唱しているように見える。

食事前のお祈りだろうか？
すると、源さんの後ろから、なにやら金色の色を纏った影が出現し始めた。

「ヤム・カアシュよ。我ら同士に寛大な恩恵を・・。」

影から物理型に変わっていた。その姿はトウモロコロシの冠をした若い青年の姿であった。

これはマヤ神話にてぐる農業と自然の神とそれでいる青年だった。ここに入学するために一般的な精霊の勉強はしていただるために理解することができた。

源さんが詠唱を終えると、続いて。周りにいた料理人達が詠唱を始めた。すると、同じように影がでて、物理化していく。

「彼らに恩恵をオオゲツヒメ！」

「我らに祝福をカーバンクル」

次々に精靈を召喚している。どれも、高靈と言われる。契約が難しいとそれでいる、精靈ばかりであった。料理人ではなく、本物のスマナーでもあるのだ。

全員の精靈が終わると、当たりを見回し、源さんが頷いた。

「ゴニゾン・〔食〕」

両手を上げて、神に大して慈悲を求めるような体勢をしていた。すると、空からキラキラと雪のような物が食堂を包み込むようにふつてきた。

「きれい・・・。」

明奈は空を見上げて、今にも泣き出しそうな姿を見せていた。あまりにも綺麗で俺も泣き出しそうだった。

そんな俺達が空に目を奪われていると、テーブルが光り出した。そして、いろんな食べ物が出始めた。
どれも今まで見たことがないような物ばかり、恐らく、この料理たち魔力の帯びているのだろう。

しかし、なんと皿やうなんだ・・・。アダレがでそうなほどだ。

「では新入生・在学生の皆さん。テーブルに手を置いてくれたまえ。

」

俺達は今の現実が受け止めるのがやっとで、なんだかわからないまま。テーブルに手を置いた。

」

「ヤム・カアシユよ。彼らに器を。」

源さんが精靈にそう頼むと、いつの間にか俺らの手にコップがあつた。

いきなりなので、驚いて。椅子から落ちて、尻餅をついている人もいた。前の席にいた、明も珍しく我を忘れて、目が泳いでいる。かなり、ぼーっとしている。

「それでは動搖している人もいるが。乾杯！！」

源さんの号令とともに入学初日の夕食が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3101ba/>

スピリット－魂の集う場所－

2012年1月8日18時52分発行